

適応指導教室における場の働きと支援者の関わり

—M-GTA を用いた課題の検討—

教育現場で起こる様々な問題は常に社会の関心を集めており、不登校はその1つである。始め問題行動として注目されていた不登校は、現在では調査・臨床研究によって複合的な原因が想定されるようになり、「どんな子どもにも起こりうるもの」という認識が広くなされている。

本研究では、学外適応指導教室において指導者及び支援者がどのような支援上の困難を抱え、その対策は何をしているか、支援の場として何が機能することが有益であるか等、半構造化面接調査を基に明らかにし、不登校支援における場の理解と指導者・支援者らへの援助の方法を検討することを目的とした。得られたデータは M-GTA を用いて分析を行った。

結果、44 の概念が抽出され 16 のカテゴリーに分類した。不登校支援の場における支援者の働きかけや工夫の中には児童生徒一人ひとりに対してペースを配慮すると同時に教育機関としての指導の側面があり、支援者に混乱や葛藤を生じさせる。この対策としてスタッフ間の連携や相談が最も支援の場において有効な手段であると語られた。教室内においては児童生徒同士の関わりを促し見守ることや、その場を提供し続けることの意味が社会との接点や学習面の指導という点において語られた。支援者の関わりと教室における児童生徒らとの関わりは児童生徒の学校復帰や自己実現に繋がるということが語られた。加えて支援者らのやりがいや向上心に移行し、教室の機能の循環がなされていると考えられた。